



父のノート

井上荒野

私の父は小説家だったが、原稿用紙に書く、ということができない人だった。

マス目に一字一字文字を入れるような書きかたをしていると、腱鞘炎になってしまふ、というのが本人の言い分だった。小説はノートに書き、それを母が——後に私も手伝って——原稿用紙に清書していた。

父が使うノートは決まっていた、B5判をちよつと横に長くしたような、正方形に近い形の大学ノートだった。ページはクリーム色でごく薄い罫線が入っている。

そのノートに、父は、本人と家族にしか判読できない小さな蟻が這ったような字で書いた。筆記用具はボールペンで、黒いインクで書かれた文章がところどころで青になったり、赤になったりしている。

た。執筆が行き詰まったときにボールペンの色を変えようとまく風穴が空くののだと言っていた。父の死後、ノートの一部をカラーコピーして額装したら、ちよつとコクトーのイラストみたいな味わいの格好いい額になった。それは今実家で、父の遺影の隣に飾られている。

私も同じノートを使っている。小説を書きはじめた頃は、父同様にまづノートに書き、自分で原稿用紙に清書していた。キーボードを叩いて執筆するようになってからも、アイディアやプロットを書き留めるために使っていた。

ノートは丸善にグロス単位で注文していたから、父の部屋へ行けばいつも段ボールの中にたくさん入っていた。そこから黙って持っていくてもよかったのだが、私はなるべく父がいるときにもらいに行くことにしていた。何となく験を担ぐ気分だ。

父はいつも私にノートを渡す前に、手近にある堅い背表紙の単行本を取って、その角でノートの表紙の縁をとんとんと叩いた。真新しいノートの縁は鋭い。うっかり触って、指の腹を切らないように、というのだった。まったく父親らしくなかった父の、数少ない父親らしい思い出である。



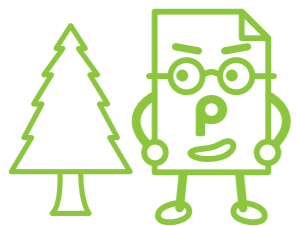
段ボールの中のノートを使い切らないまま父は亡くなった。残されたノートを私は大事に使っている。私にとっては子供の頃から見慣れた、何の変哲もない大学ノートなのだが、昔のものなので新鮮に見える人もいるようだ。「それ、どこのですか」「かっこいいですねえ」などと言われてちよつと得意になったりする。

今、私は原稿をパソコンで書き、アイディアやプロットもパソコンやスマートフォンに入力するようになったけれど、それでもノートを手放すことはない。編集者との打合せのときに持っていき、父がボールペンの色を変えたように、モニターを覗んでもどうにもうまいアイディアが浮かばなくなったとき、ノートに書いてみたりする。旅行のとき、向こうで仕事をするつもりがなくてもとにかくノートだけはバッグに入れていく。「使う」というより「持っている」ことに意味があるのかもしれない。

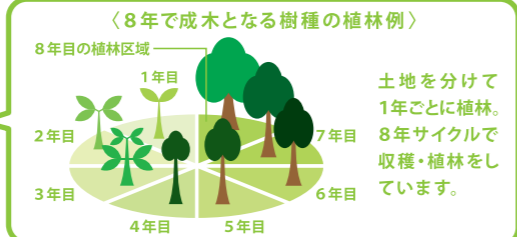
ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。



<http://kamitsubu.com/>

◆次回は12月2日号、福田和也さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo: Shiro Miyake